

身体の実践, 人格の 関係性としての「死者供養」

The Physical Practice of *Shisha-Kuyō* (spiritual aid for the dead)
in Terms of a Personal Relationship

池上良正

IKEGAMI Yoshimasa

はじめに

①「死者供養」への視座

②「信仰」の問い方

③「死者供養」とモーニング・ワーク

④存在から関係へ

おわりに

【論文要旨】

本稿では、多くの日本人には自明な言葉として受け取られている「死者供養」という実践群をとりあげ、これを理解するためには、生者と死者との間に交わされる身体的実践や、人格表象の関係性に注目した動的な視座が必要であることを論じた。言い換えれば、西洋近代を特徴づけてきた、霊肉二元論的な人間モデルや、自律的で完結した統一体としての個人といった前提では、十分な理解が難しいのではないか、ということである。プロテスタント的な「宗教」観から強い影響を受けた近代の宗教研究では、つねに存在論的な根拠をもつ「信仰」を明らかにしようとする傾向が強く、「死者供養」と総称される実践も、「死者信仰」「祖先崇拜」などの枠組みによって説明され、実践がもつ積極的な意義を単独に論じるといった発想は乏しかった。

具体的な考察としては、まず、沖縄における「死者供養的」な実践を事例として、「実証性」を標榜した従来の研究が、実は「原信仰」「靈魂観」「他界観」といった近代の学問体系の思考方法に強く拘束されていたのではないか、という疑問を提示した。むしろ多くの人々にとって大事なのは、死者の人格と関わるための実践の作法や様式である。

さらに、身近な死者を「供養する」という具体的な行為と、近年の精神医学などで注目されている「喪の仕事 mourning work」との類似性に注目し、フロイトにはじまる精神分析学によって論じられてきた mourning 論が、近代西欧的な人間観を前提としていたのに対して、東アジア社会に展開した「死者供養」を理解するためには、人格の関係性に焦点を合わせた動的な枠組みが必要であることを論じた。そこでは、「存在論的な信仰」から、「縁起論的な実践」への視座の転換が重要になる。

【キーワード】 死者供養, 近代西欧の人間観, 人格の関係性, 喪の仕事, 縁起論的な実践